

傷病鳥獣保護事業における哺乳類の保護事例～ホンダタヌキの症例を中心に～

緒形倫子

よこはま動物園において 2009 年から 2018 年の 10 年間に保護された傷病鳥獣について、その保護件数の推移を、また、特に哺乳類に着目し動物種の内訳や保護原因についてまとめた。

まず、傷病鳥獣の保護件数は毎年増加傾向にあったが、2015 年を境に減少へと転じている。これには、2016 年、2017 年に高病原性鳥インフルエンザ対策として冬季の鳥類受け入れを中止したことや、2018 年よりハクビシンの受け入れを中止したことが影響していると考えられる。

また哺乳類に着目すると、10 年間で保護されたのは 399 件で、その動物種の内訳をみるとホンダタヌキが 50%、アブラコウモリを主体とするコウモリ類が 27%、ハクビシンが 19%、その他の動物種が 4%であった。保護原因はホンダタヌキで疥癬症が最も多く(50%)、続いて交通事故(18%)、誤認保護(13%)であったが、ハクビシンでは誤認保護(34%)、交通事故(26%)、動物による外傷(15%)であった。ともに比較的人の行動圏の近くに生息する動物ではあるものの、両種的生活様式の違いが保護原因の違いと関係している可能性が考えられる。

次に、保護原因別の放野率について検討したところ、両種ともに共通して誤認保護やわなで保護された個体では 8 割以上と高い放野率を記録した。また、それ以外の保護原因であってもホンダタヌキでは約半数が放野可能である一方、ハクビシンではそのほとんどが放野不可能であった。